

五十嵐太郎 編

建築学生の ハロウィーク



研究・教育・文化を盛り上げる



設計に自信がある



企画・運用は大切だ



海外で働く

[改訂増補版]



建築以外のジャンルに興味あり



ものづくりの現場で働く

職種

52



建築をサポートする

彰国社

改訂増補版によせて

五十嵐太郎

おかげさまで2009年に出版した『建築学生のハローワーク』は好評につき、今回、内容を一段とパワーアップして、改訂増補版を刊行する運びとなった。現在、ネット上にあらゆる情報があふれているようでいて、学生の関心が高い、肝心の建築関係の職業のモデルについては意外に知り得ることが少ない。ゆえに、こうした需要があるのではないかと思い、彰国社の神中智子さんに持ちかけ、もとの企画が通ったが、本書が登場した後に幾つかの類書も刊行されている。花形であるスター建築家以外にも、さまざまな生き方がることが注目されているのだろう。また予想していなかった反応だが、『建築学生のハローワーク』の韓国語版も2010年に刊行された。

国境を越えて、建築学生は同じ悩みを共有しているのだ。激動する社会にあわせて、建築をとりまく環境も大きく変わっている。だからこそ、建築家2.0をめぐる言説や本書にインタビューを収録したコミュニティデザイナーの山崎亮が注目されるのだろう。

今回の増補にあたっては、とくに事業計画、マネジメント、プロデュースなどを扱う、企画や発注系の職種に重点を置いた。建築の領域を広げる職業は、時代を映す鏡でもある。

マンガ・イラスト：たかぎみ江
ブックデザイン：長島恵美子

はじめに

建築家以外にも、 100通り以上の生き方がある

五十嵐太郎

建築系の大学を卒業した後、誰もが建築家になるわけではない。

いや、アトリエ系といわれる建築家になるのは、むしろ少数派である。しかも各種のメディアで紹介され、華々しく活躍できるのは、ほんの一握りでしかない。という当たり前の事実気付くのは、大学に入ってからだろう。一般的な高校生がかろうじてイメージできる建設業の職業は建築家だからである。それもアントニオ・ガウディや安藤忠雄のような有名性を帯びた人物に限られる。多くの学生は、いざ大学で設計課題に取り組んで始めて、デザインではやっていけないと感じたり、建築家への道がいかに大変なのかを知る。では、建築家以外にどのような進路があるのか？ 社会に出たらどんな仕事に就こうとも、さまざまな職種があることにや応なく気付くはずだが、肝心の学生時代にはそうした情報に触れる機会がほとんどない。巷には建築家になるための本があまり存在し、100通りの物語を読むことも可能だろう。だが、軽く100種類を超えるそれ以外の職業はあまり知られていない。それぞれの領域で活躍していく道があるというのに。

誰もが就職に悩む。だが、建築家は数ある職業の1つでしかない。全員がそこに進むわけでもない。ゆえに、本書がめざしたのは、建築を学んだ後に就職する仕事の広がりを知ってもらうことだ。建

築家が唯一の職業ではない。ちなみに筆者が本書を企画した直接のきっかけは、大学で就職担当を引き受けたことである。実に多様な業種から求人案が届き、いろいろな会社から人事の担当者が訪れ、説明会が行われる。あらためて驚かされた。時々学生からも、どのような職種があるのかを質問される。とはいえ、筆者も詳しいわけではない。だったら、建築家になる以外の進路を数多く紹介する書籍があったらよいではないか。幸いこうした企画が受け入れられ、筆者が監修した『卒業設計で考えたこと。そしていま』（彰国社）と同様、現場で欲しいと感じた思いが、1冊の本を生み出した。

筆者も、建築学科に進んだとき、建築家になりたいと思っていた。学生のとき、ほかの仕事はよくわかっていなかった。また個人的に企業への就職活動を経験したことがない。学部の卒業時は、バブル経済の絶頂期であり、各種企業の人事担当者が学生を引き連れて、毎晩のようにただ酒を飲ませてくれた。それが異常な状況であることに気付いたのは、後になってからである。結局、筆者は大学院を受験したが、それは、ネクタイを締めなくてもいい職業に進みたいと漠然と考えていたからだ。一度失敗してから、初めて建築で飯を食っていく覚悟を決めた。2年目によく合格し、現在の自分がある。数多く存在する建築家とは違い、先人の事例が少ない仕事だけに、あるモデルをめざしたわけではなく、気が付いたら、こうなっていたというのが正しい。

ところで、ル・コルビュジエやレム・コールハースにしても、既存の建築家になろうとしたというよりも、ル・コルビュジエ、レム・コールハースという職業を生きた。おそらく、どんなジャンルでも、仕事を拡張し、新しい領域を開拓すれば、固有名詞が職業になる。職種はいくらでも増えていく。

『建築学生のハローワーク』は、筆者が学生のときに読みたかった本でもある。

contents

改訂増補版によせて	003
はじめに	
建築家以外にも、100通り以上の生き方がある 五十嵐太郎	004
52の職種マップ	010

設計に自信がある 012

01 建築士(ゼネコン・組織設計事務所の意匠設計部門)	014
02 建築家	020
03 構造設計者	026
04 設備設計者	032
05 ファサードエンジニア	042
06 工場設計者	050
07 ランドスケープアーキテクト	052
08 土木デザイナー	060
09 照明デザイナー	062
10 音響設計・コンサルタント	068
11 店舗開発・設計者	074
12 インテリアデザイナー	076
13 家具デザイナー	078
14 キッチンデザイナー	080
15 保存・修復建築家	084
16 映画美術監督・デザイナー	086
Interview	
ゼネコン設計部で働く伝説のコンペキラー 宮下信顕	016
人が人を呼ぶ前向きな提案力 谷尻 誠	022
京都から発信する、構造設計のエッジ 満田衛資	028

省エネ、信頼性、国際化。拡張する設備設計の可能性 三由 賢	034
ガラスファサードのエキスパート 松延 晋	044
「かたち」をつくる人から「しくみ」をつくる人へ 山崎 亮	054
人の行為から明かりを解く照明デザイン 角館政英	064
緻密なプロセスから得るダイナミックな効果 小野 朗	070

企画・運用は大切だ 088

17 都市計画者	090
18 ディベロッパー	092
19 アセットマネジャー	098
20 コンストラクションマネジャー	102
21 プロパティマネジャー	108
22 ファシリティマネジャー	114
23 建築計画者	120
24 建築プロデューサー	126
25 イベント・空間プロデューサー	132
26 福祉住環境コーディネーター	140
27 リフォームアドバイザー	142
28 政治家	144
Interview	
都市を創るディベロッパーに建築の視点を持ち込む 篠原徹也	094
発注者の立場から建築をマネジメントする 内藤滋義	104
ストック型社会に向け、建築の価値を問い直す 田村誠邦	110
ファシリティマネジメントという空間的経営戦略 松岡利昌	116
建築家をサポートする名脚本家 小野田泰明	122
ヒトとおカネを動かし新しいコトと場を生み出す 広瀬 郁	128
メディアを駆使して建築・都市をつくる 馬場正尊	134

ものづくりの現場で働く.....146

29 建築現場監督.....	148
30 大工.....	156
31 左官職人.....	162
32 庭師.....	164
33 家具職人.....	166

Interview

世界で通用するプロジェクトマネジャーを目指して 正光俊夫.....	150
材料を吟味し、木造りから自分の手で 村上幸成.....	158
構造エンジニアとしてのアプローチから斬新な木工家具をつくる 野木村敦史.....	168

建築をサポートする.....174

34 コストプランナー(積算・見積り).....	176
35 地質・地盤調査員.....	182
36 CADオペレーター.....	184
37 CG制作者(レンダラー).....	186
38 ソフトウェア開発者.....	188
39 建築模型制作者.....	192
40 秘書.....	194
41 確認検査員.....	196
42 意匠審査官.....	198

Interview

受注から施工まで、トータルな視点でコストを見極める 落合雄二.....	178
-------------------------------------	-----

研究・教育・文化を盛り上げる.....200

43 大学の研究者.....	202
44 研究員(行政関連の建築技術研究所).....	208
45 研究員(民間の建築技術研究所).....	210
46 高等学校教諭.....	212
47 学芸員.....	214

48 建築写真家.....	220
49 建築評論家.....	222
50 新聞記者.....	228
51 建築ライター.....	230
52 編集者.....	232

Interview

折り紙から新しい建築を創造する 館知宏.....	204
建築と都市をつなぐインディペンデントキュレーター 寺田真理子.....	216
建築を軸に置きつつ発想するプロジェクト・プランナーという職業人 真壁智治.....	224
地方都市から建築文化を発信する 森内忠良.....	234

海外で働く.....238

Interview

ドバイから期待される「MADE IN JAPAN」の価値 丸山剛史.....	240
北京を生き抜くタフな建築作法 迫慶一郎.....	246
グローバルズムに対応する強靱な設計力を鍛える 豊田啓介.....	252

建築以外のジャンルに興味あり.....258

Interview

平和を構築する 伊勢崎賢治.....	260
実空間にはない世界をつくりたい 渡邊英徳.....	272
ゼネコン勤務を経てスピリチュアリストに転身 暁玲華.....	278

Column

ニワトリと卵と設計事務所 松田達.....	038
素材や製品から建物をつくる 納見健悟.....	048
独立10年、「普通」の先の建築へ 星裕之.....	082
長期のビジョンを持ち不動産で収益を上げる 加藤純.....	100
BIMはパラダイムシフトを起こすか? 納見健悟.....	154
資格って、いっぱい取ればいいのか? 五十嵐太郎.....	172
アルゴリズム的建築がソフトウェア開発も促す? 松田達.....	190
略歴.....	284
取材協力/写真・図版クレジット.....	287

01-16

設計に 自信がある

建築学科に進んで、誰もが一度はなりたい!

と思うのが、建築家である。

野球でいうなら、ピッチャーであり、

4番打者というべき花形の役割だ。

ただし、基本的に建築は1人では設計できない。

構造や設備の設計、あるいは照明やインテリアのデザイン、

そして音響の計画など、

関連するさまざまな職種が介入し、総合的に空間はつくられる。

家具から土木まで、あらゆるスケールで環境を設計すること。

その広がりのをぞいてみよう。

(五十嵐太郎)



企業で、建築を設計する

建築士とは、建築士資格を背景とする建築関連職全般を指す言葉だが、ここではそのうちゼネコンや組織設計事務所に所属し意匠設計を担当するサラリーマン建築士を紹介する。

クライアントの要望を聞き、敷地を読み、図面を描くという大きな流れはどんな設計者にも共通する。特徴は、大規模な建築を主に扱うこと。そして企業に属するものとして、信用を壊さず建築を抜かりなく仕上げる必要があることだ。そこで問われるのが、バランス感覚と、多岐にわたる関係者をまとめるマネジメント能力である。

ゼネコンで働く建築士の特徴は、技術や建設コストから建築を発想する力に長けていることだ。日本のゼネコンは伝統的な大工棟梁の仕組みを受け継いでおり、設計施工を一括して請け負うことが多いためである。設計にある種の制約がある一方で、技術的な裏付けのある仕事ができる利点がある。また、アトリエ系設計事務所などの技術的バックアップという位置付けで仕事をすることもある。

一方の組織設計事務所だが、ゼネコンとの大

きな違いは、施工が別会社になる点だ。そのため組織設計事務所には設計図通りにつくられているか監理する部署があり、これがクオリティコントロールの要となっている。公共工事を扱うことが多いが、これは公共の仕事では設計施工一貫での受注が禁止され、ゼネコン設計部の入るすぎがほとんどないためだ。

両者ともに、オフィスビル、教育施設、集合住宅などビルディングタイプごとに部署が分かれ、状況や希望に応じて異動がある。企業規模により仕事のスケールや内容、待遇面に差があるため、学生の就職希望は大手に集中する。大手に就職するには、学歴が重要となる面もある。一般公募での採用が行われる会社も多いが、大学ごとに採用枠があり学内での選抜を経て教員の推薦状を入手することが就職プロセスの要となることもある。大手ゼネコンや組織事務所では、模型制作やプレゼン資料作成などのアルバイト採用も多数。そのまま就職につながることはほとんどないが、雰囲気を知っておくことは有効だ。(平塚 桂)

- 主な就職先:ゼネコン(鹿島建設、清水建設、竹中工務店、大林組、大成建設など)。組織設計事務所(日建設計、日本設計など)。
- 就職方法:一般公募や大学推薦に応募。
- 必要な資質:バランス感覚、協調性、粘り強さ、コミュニケーション能力、マネジメント能力。
- 関連資格:1級建築士。

ゼネコン設計部で働く 伝説のコンペキラー

宮下 信顕 (竹中工務店 東京本店設計部)

2人の叔父が建築家で幼いころからアトリエの雰囲気親しんでいた宮下信顕氏にとって、建築設計の仕事は身近な存在だった。自然の成り行きで大学の建築学科に進学したが、特に熱心に取り組んだのはアイデアコンペへの応募である。「このカップめんにお湯を注ぐ時間で線を1本引ける、と食べる時間も惜しんで頑張りました。今より15kg以上もやせていたのです」。ピーク時の応募数は年間21本。入賞率は約4割と、圧倒的な戦績である。そのコンペキラーぶりによって有名建築家に顔を覚えてもらうこともあったという。

一方で、アトリエ系建築設計事務所でのアルバイトにも学部の2年次から通い続けていた。当時の自分を振り返り「極端なほどのアトリエ志向でゼネコンと組織設計事務所の違いもわからなかった」と語る宮下氏は、当初、卒業後もそのままバイト先に就職したいと

みやした・のぶあき

1972年、長野県生まれ。1995年、東京理科大学工学部建築学科卒業。1997年、同大学大学院修士課程修了、竹中工務店入社。現在、東京本店設計部課長。学生時代よりアイデアコンペに参加して40点以上入賞。担当したAGC（旭硝子）のモノづくり研修センター（2006年）は日本建築学会2008年作品選奨等、国内外から18件の表彰を受けた。1級建築士。



考えていた。しかし当時は圧倒的な建設不況の時代で、プロジェクトが激減。アトリエで下積み生活を送るよりも、大きな組織のほうが自分のデザインを実現するチャンスが高いのではと考えるようになった。そこで建築家やアトリエに勤める先輩に相談したところ、竹中工務店の名前が出てきた。これが入社するきっかけである。

宮下氏は竹中工務店が手掛ける建物に「東京タワー」「有楽町マリオン」といった、都市を象徴するような作品が多いことに気付き、「その建物がなければ都市の文化が欠落してしまうような、街にインパクトを与える大きな建物を手掛けられれば」と入社を決意した。自分が応募していたコンペの入賞者たちに、竹中工務店に勤務する先輩が複数存在することも決め手となった。

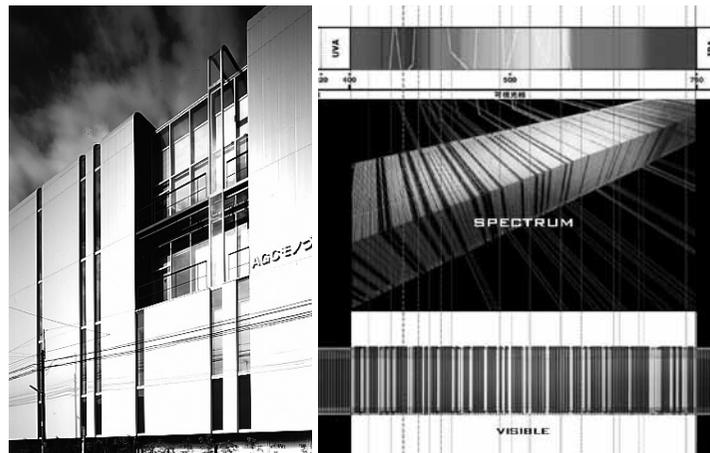
1年間の研修を経て工場や倉庫の設計に携わるグループに配属さ



石塚電子のワールドテクノロジーセンター（2000年）

れた宮下氏にチャンスが訪れたのは、入社2年目の12月。「当選したらお前に任せる」と上司から後押しを受け、石塚電子のワールドテクノロジーセンターのコンペに勝利した。学生時代に取り組んだ3次元CADの研究を発展させたベジェ曲線で囲まれた建物だ。しかし実施設計の段階になると、すべてのファサード面の曲率が異なる建物は施工性も悪く、実作のない宮下氏にとっては難題だった。そこで頼りになったのが、大手ゼネコンならではの技術的なバックアップだ。「複雑な構造解析をはじめ各分野の専門家が社内において、困ったときは相談できるんです。社内のネットワークの意義や、みんなでも協力しながら建築をつくる楽しさを知りました」。

宮下氏がこれまでかかわってきたのは研究所やオフィスを中心とする、会社の成長の根幹にかかわる施設である。こうした施設では



左:AGC（旭硝子）のモノづくり研修センター（2006年）。右:同コンセプト図。宮下氏が学生時代に着想したイメージをもとに描かれた

コストも厳しく、そして何より早い完成が求められる。説明会からコンペ提出締切まで1カ月というのはざらである。それまでに厚さ2cmを超えるような提案書に加え、見積りや構造計算まで必要だ。

その1つの例が、AGCモノづくり研修センター（旭硝子）だ。「コンペ説明会の1年後には、施設を稼働させるスケジュールでした」。スタートは、昼休みに30分で起こしたCGのドローイング。学生時代にスタディしていた、光のスペクトルをモチーフとする案である。これが全体を貫く明確なイメージとなり、完成までの各フェイズでの判断に役立てられ一気に走り抜くことができた。「多くのアイデアコンペへの挑戦は、現在もとても役立っています。多彩なビルディングタイプの仕事が動くゼネコンだからこそ、アイデアの引き出しを使うチャンスがたくさんあるのです」（取材・文＝平塚 桂）

43 大学の研究者

激動の時代に 学問を仕事にすること

大学をめぐる状況は変化している。かつては勉強が好きで、就職していく同期を横目に、大学になんとなく残っていれば、やがて研究室の助手になり、そのうち別の大学の先生になるか、同じ研究室を引き継ぐことになっていた。1990年代以降、修士課程への進学率が飛躍的に向上し、さらに博士号を取得する建築系の研究者は急激に増えた。したがって、博士号や留学の経験は、必ずしも希少価値ではなくなった。ポストク問題が叫ばれるように、博士号を取得した後も、就職口のない研究者が大量にあふれ、非常勤講師やアルバイトで食いつなぐケースが登場している。何度も公募にトライし、大学に就職口を探すのが一般的である。だが、やっと就職が決まっても、終身雇用ではなく、何年かの任期制になっていることも多い。研究者もサバイバルの時代なのだ。

現在は、博士論文だけではなく、黄表紙と呼ばれる日本建築学会の論文報告集に何本か発表していることなども条件に課せられていることが多い。アカデミズムの世界では、著作や雑誌掲載論文よりも、査読論文の方が高く評価され

る。美大系に比べて、工学部に所属する建築学科では、こうした傾向が著しい。なお、給料は私立大学の方が高く、組合などがしっかりしていると、さらに良いという。少子化の時代を迎え、大学では学生の獲得競争が始まっており、サービス業化も進む。自分の好きな研究だけをやっている環境は減っていくだろう。大学は大きな変動の時代を迎えている。また、出世すると、各種の委員会の仕事が増え、さまざまな雑務もこなさなければならない。

もう1つの変化としては、90年代以降、アトリエ系の建築家が大学の教職に就くことも当たり前になった。こうした場合、必ずしも修士論文や博士論文を書いていなくても、設計した建築作品や社会的な活動によって、これに相当する業績が認められると、先生になれる。例えば、日本建築学会作品賞は大きな効力を持つ。安藤忠雄も東京大学の教授に就任した。『新建築』の作品掲載も論文としてカウントされるケースがあるという。

(五十嵐太郎)

- 主な著名人：斎藤公男、陣内秀信、鈴木成文、鈴木博之、藤森照信など。
- 就職方法：最近は公募が多い。
- 必要な資質：研究が好きであること。学生を指導でき、雑務もこなせること。
- 関連資格：黄表紙などの査読論文を何本か提出していることや、1級建築士などの資格が求められることもある。